子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1993年1月1日発行　[隔月発行]

文化高知

'93年1月 NO.51

池知　隆

(財)高知市文化振興事業団

草の根まちづくり運動

西山　彰一

最近まちづくりを考える様々なサークル活動や勉強会が開催されている。以前、まちづくりという言葉を聞くと行政や都市設計に携わる専門家の方の仕事というイメージが強かった。「だれかがまちを良くしてくれるだろう」とか、「まちづくりは行政がやるもの」といった他人まかせの住民意識から、どのようなまちに住んでみたいのか、そして高知のどういう面が素晴らしいのか、その理想像を描く市民の活動に、時代の変化を強く感じる。草の根による建設的な行動が必ず明日の高知のまちづくりの一翼を担い、地方都市の新たな発展につながるものと確信する。

◇

私は十年程前に、㈳高知青年会議所に入会し、半年理事長としての役をおおせ付かった。㈳高知青年会議所は、より良き明日の郷土建設の為に社会・経済・文化・福祉問題に取り組んできた。長期的な視野に立ち、事業活動を通じてまちづくりのお手伝いをさせていただいている団体で、本年創立四十周年を迎える。会員は、建築・金融・販売業・メーカーそして専門職など様々で、業種だけでも三十業種近くある。まるで職業別電話帳を小さくしたように思える会員名簿である。それぞれの会員は、職業上の利害を越えて、自分の職域にかかわりがある無しにかかわらず、そして得意、不得意分野を問わず色々な社会の問題に対し、原因調査に始まり、具体的な解決方法について、討議を日々重ねている。会員は昼間仕事を持っているので、夕方六時ぐらいから活動を行う。ボランティア活動であるので、会員に対して金銭の報酬は全くない。強いて収穫といえば、諸団体の皆様との交流を通じて幅広い知識が得られ色々な体験が出来ることである。いただいた知識や情報を再び次の活動に生かし一歩ずつ、そして一人では本当に微力ではあるが、何かの役に立てばと、努力を続けている。日々の自分の職業を通じて社会に貢献する喜びとまた一味ちがった楽しみが、活動のなかにある。

◇

今から十年前、青年会議所メンバーが、赤フンドシ姿で、江ノ口川に放棄された自転車やスクラップを引き上げ、川の浄化と環境保護を訴えた。私も、赤フンドシ姿になってその事業に参加した時、新婚であった。私の醜いビール腹と赤フンドシ姿を見た妻は、真剣に実家へ帰ることを考えたそうである。「環境保護を訴えるのに、なぜ赤フンドシで突飛なことをするのか」とか「市民の方々に不快感を与えたり、笑いものになるのではないか」といった反対があり、青年会議所が半分に割れる騒ぎだったと聞く。真っ二つに分かれた意見が、どういう経過でまとまったのか今では伝説となっているが、「若者である以上、アッと驚くような行動でなければ駄目だ」という一言で決まったそうだ。理屈より志を大切にする気風が引き継がれていると思う。

江ノ口川は私たちのまちの顔である。随分きれいになって来たが、未だ子供が水遊び出来るまでには至っていない。いつの日か必ず、子供連れで水辺を楽しむ光景を実現したい。十年前に始まった江ノ口川の清掃活動は、現在、行政と市民の継続的な努力によって、七河川一斉清掃事業という恒例の行事となった。㈳高知青年会議所が本年、四十周年を迎える節目の年から、七つの河川が流入する浦戸湾の浄化推進と、浦戸湾をつかったイベントをひとつの足がかりにして、市民の皆様が集う場を作ってみたいと考えている。

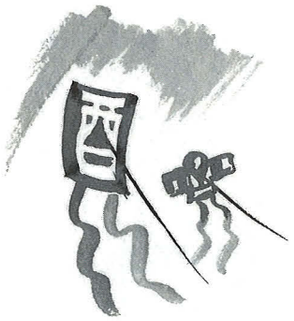
◇

限られた一部の人々がまちの明日を考える時代から、生活を通じてまちづくりに参加が出来る時代となっていると思う。昨今のまちづくり勉強会の開催や、楽しみながらまちを好きになっていく企画は、時宜を得たものである。物の豊かさから、心を大切にしようとする時代、草の根まちづくり運動が身近でそして生活の豊かさを求める気持ちの現れであると思う。ハイキング姿で、年末のまちの清掃をしている家族を見た。子供さんも楽しそうに手伝っていた。生活を楽しみながら、人と対話が出来るまちの実現は近いと感じた。

（社団法人高知青年会議所理事長）

追手前高校のこと

川田　稔



私は、昭和三十八年に追手前高校に入学し、四十一年に卒業した。その後、研究者の道に入ることとなったが、自分の選んだテーマが、べつに意図したわけではないのだが、何らかのかたちで追手前高校と関連があり、不思議な気がしている。

これまで私は、民俗学者として知られ近代日本有数の思想家でもある柳田国男を、おもに政治思想史的な観点から研究してきたのであるが、それとならんで同時代の代表的な政治家である原敬や浜口雄幸にも関心をもっていた。というのも、そもそも彼らの生きた大正から昭和初期にかけての政治や思想の動向に興味があったからである。

＊

私の在学当時、追手前高校に、仙石益造先生という方がおられた。おもに世界史を担当し、ときどき地理も教えておられた。小柄で、一見、沈思黙考型の先生であったが、けっこうユーモアもあった。その授業は熱がこもっており、よく準備された内容で、真摯な人柄とともに生徒に相当の人望があった。ある時、シェークスピアについての話をしていて、かの『リチャード三世』の一節を教壇で大真面目に自分で演じてみせ、みんなが唖然としたこともある。

＊

仙石先生が、卒業後にお会いしたさいに、私が柳田国男の研究をしていることを知って、永橋卓介氏のことを話してくださった。永橋氏は、岩波文庫に収められているフレイザーの『金枝篇』や『サイキス・タスク』、W・R・スミスの『セム族の宗教』などの訳者として著名な人で、柳田国男とも交流があった。よく知られているように、フレイザーの『金枝篇』は、柳田国男の民俗学のひとつのベースになっているもので、柳田自身わざわざイギリスに住むフレイザーを訪ねている。

その永橋氏が、仙石先生の恩師にあたる方であったのである。先生は、かって二十代のころ、幡多郡三原村の三原中学校で教員をしており、そのとき校長であった永橋氏に強い影響をうけたとのことであった。氏は三原村出身で、オックスフォード大学で人類学を学び、そこでフレイザーの知遇をえて、著作の翻訳許可をうけた。その後、慶応大学の教授となったが、戦災のため郷里の三原村に帰り、そこで中学の校長の職についたのである。

氏は、多くの人類学上の仕事を残しているが、なかでも先にあげた幾つかの翻訳は優れたもので、いまなお高い学問的評価をうけ、多くの人に読みつがれている。

＊

原敬と浜口雄幸についていえば、原は、大正中期に最初の本格的な政党内閣を組織した首相として知られているが、岩手県盛岡の出身で高知とは何の関係もない。しかし、その原の構想を引き継ぎ、政党による国政の運用をほぼ確立した浜口雄幸は、追手前高校の前身である高知中学校を卒業しているのである。

いうまでもなく浜口は、昭和初期に民政党の党首として内閣総理大臣をつとめ、政党政治のシステムをほぼ実現したばかりでなく、世界軍縮にむけても力をつくした人物で、近代日本屈指の政治家の一人といわれている。しかし首相在任中、東京駅において右翼団体の青年によってピストルで撃たれ、それがもとで死亡した。最近、その日記が出版されたが、近年の日本をめぐる状況を考えるとき、今後、政治家としての浜口への関心は強まってくると思われる。

浜口は高知市五台山の唐谷に生まれ、そこから高知中学に通学していた。その浜口の中学時代の資料を、私は追手前高校在学中に、うす暗い資料室のようなところで見たことがあった。いまではそのことがなにか不思議に感じられるのである。

（日本福祉大学教授）

子どもはなぜ描くのか 1

〝自己〟の芽生えと円形

濱田　美智

私が幼児画の研究に取り組んだ頃は、幼児期の「なぐり描き」や「象徴期」の分野に関する先行研究は極めて少なく、かつ幼児画としての価値もあまり認められていませんでした。しかし一方では、乳幼児に関する研究は一九五〇年代を境に急激に進歩し、特にコンピューターの発達に伴い乳幼児行動の分析が盛んに行われ、学問の一分野として飛躍的な進歩を遂げました。

それまで無力・無能で全く受身的存在であった乳児期に関して、一九六〇年から七〇年代にかけて著しく知見が積まれました。乳児は新生児から優れた感覚能力や知覚能力が見え、すでに行動様式にも大きな個人差があることが注目され、乳幼児期の有能性が強調されるようになりました。更に近年では、乳児は周りの人と関係を結んでいく能力を生来的に備えた積極的な存在であることも確かめられ、周囲の特定の人（多くは母親）との関わり方がクローズアップされて来ました。

一方幼児画の世界においても、一九五〇年代を境に、新しい幼児画の見方が導入され多くの人々の支持を得ました。つまり幼児の描いた絵には、子どもの感情・思考・願望が投影されていると言うのです。色や形やストローク（描線）から、その絵をどのような心理状態で描いているのかを判断し、時には心の葛藤や恐怖心や不安を取り除き、子どもの精神衛生に役立てるというのです。

このように幼児の絵は、直接的に心の内面が現れるため、逆に幼児の絵を見れば描いた子どもの心理状態が理解できます。このことは既に多くの学者により確かめられています。したがって、幼児画は「何を描いているか」という形象の表現より「どのように描いているか」が問題です。

それらを解明する手掛かりとして線の伸びやかさ・筆圧の強弱の程度・紙面使用のバランス・使用している色彩・絵の具の量等を分析尺度として、一枚の絵を丁寧に見てゆき、同時に日常生活や遊びの状態、友人関係や親子関係（特に母子関係）を継続的に観察しながら絵と対応させて判断してゆきます。

●なぐり描きから円形へ

では、子どもの絵はどの様に変化するのでしょうか。

初めてクレヨンを握った子どもは、紙にクレヨンを擦りつけるように無秩序な点や短い線を描きます（図1）。まだ手や指先の動作がうまく調節できず、感覚運動にたよりながら、秩序のない線を繰り返し描くうちに、紙面に残した筆跡の集合部分に視線が注目するようになります。この頃より、次第に目と手の対応がうまくなり「視覚的統御のある線」、つまり同一方向に横線・縦線を引く高い段階に進みます（図2）。

図1．未分化ななぐりかき

図2．視覚的統御のあるなぐりがき

さらに、肩、肘、手首の関節や筋力の発達は動作を統合し、腕全体の運動による滑らかな美しい曲線「円形スクリブル」が描けるまでに発達します（図3）。

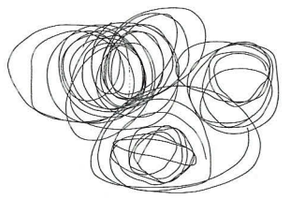


図3．円形スクリブル

この時期の二歳児は、「ボクの」「私の」の言葉に象徴されているように、そろそろ〝自己〟を意識し始め、自己主張がはじまります。クレヨンを握り、次第に方向性のある絵を描くことは、手と視覚の対応バランスがとれていることを示すと共にクレヨンが自由に駆使できる喜びと同時に、自信を持って次第に自己のイメージに基づいて描いてゆきます。このため、一人一人が特徴のある絵を描く様になります。後日、クラス全体の絵の中から「これは僕の」と的確に自分の絵を見つけ出せるのは、

画面に描いた〝自己〟の再発見と、自己を視覚的に捉えた現れであり、子どもにとっては、大きな喜びでありましょう。

図3のような円形スクリブルは、すべての幼児が自らの内発的エネルギーにより好んで描く渦巻で、円形の源であるという意味から根源的渦巻と呼んでいます。この渦巻の内に自己を現すのに都合のよい〝円形〟のフォルムが隠されています。二歳半を過ぎる頃、多くの子ども達が、図3のような様々な円形スクリブルを描くことは、発達の上から注目すべき出来事であると共に、また人間の発達の素晴らしい側面を物語っています。

初期のなぐり描きでは、硬直した直線が多いことに比較し、後期には腕や肩の関節を中心に回転させ、人体の構造がテコとなり曲線運動を起こしていることが分かります。この曲線運動は、子どものあらゆる知覚が視覚的に緊張を呼び起こし、全神経を紙面に集中させ描きます。やがて作業を終えた子どもは、快感と満足感に浸り切ることができるのです。

この渦巻は次第に図4の様になります。初期の集中的に描いた根源的スクリブルから次第に円は大きく螺旋状となり、やがて図5の様な一つ一つ単独円ができます。これは人間が最初に描くフォルムの原型である〝円〟の誕生です。円形が自由に描ける様になると、図6や図7の例のように自信を持って紙面一杯に自己表現できます。このように円形の獲得は、造形上の価値と共に、自己認識や自己主張のシンボル（象徴）として円形を用いていることが分かります。

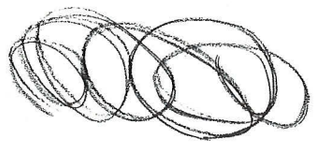


図4．円形スクリブル

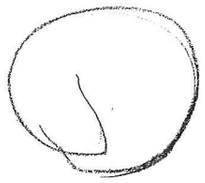


図5．単独円

●イメージの芽生え

図8の絵のように、様々な円形や同心円にイメージを浮かべ「ママ、お月さま、おうち……」と意味付けが始まると次のステージの象徴期に移行します。象徴期には円形の一つ一つにイメージを浮かべて命名するわけですが、同時に自己認識を強く持つ時期でもあります。

イメージの芽生えと自己の存在の表現は、象徴期の絵の特徴として捉えることができます。そして子どもの興味や関心は、自己から他者に向けられ、自己領域を広げていることが、図9や図10の絵にも現れています。この二枚のお話しの絵は、象徴期の一つの描き方である「動作的表出法」で、動作をそのまま紙面に現し、動きの中に自分のイメージを捉えて表現しています。また丸いものを円で描くのではなく、「モノ」一般を全て円形で描いていることも図から判断されます。

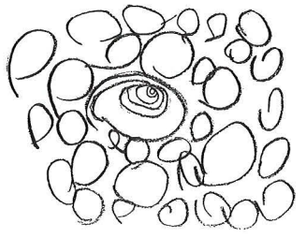


図6．同心円と単独円

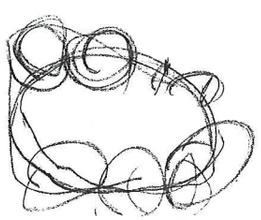


図7．太陽図形のなかま

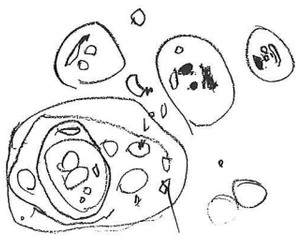


図8．「ママ、お月さま、おうち……」

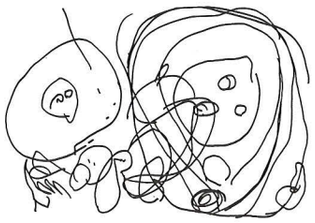


図9．「ゆうちゃんがね、ママと一緒に幼稚園に行っているの」

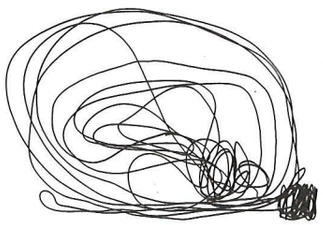


図10．「車でいったの……」

この時期のイメージの芽生えを上手に育てることは、将来の創造的活動のためにはとても大切なことだと思います。もし大人がこの時期の活動を無意味な活動として、描くことを阻止したり、必要以上に干渉すると子どもの集中力を阻害するばかりではなく、イメージの形成も阻み、幼児の成長を抑制することになります。

（高知女子大学保育短期大学部教授）

まず、キッド・ウオッチング！

伊藤　経子

平成四年八月三十一日のことです。

一歳五カ月の萌ちゃんは、Tさんのお家で、薬の景品の小さなかえる・人形・ねこ・だるま・まりたちと遊んでいました。手に持ってなめたり、ぎゅっとにぎったり、パッと放ったり、二つずつ持ったり、ババッとかきちらしたり。

数にして三十くらいある中で、同じ種類のものがいくつもありました。そこで、頭も使って遊ぶ方法をと思って、みどりのかえるを手に取って、

「これと、おんなじの、どれ？」

と言ってみました。

「？……」

「これと、おんなじの、どれ？」

「？……」

同じっていう言葉、まだ知らないんだと思ったので、

「これと、おんなじの、これよ」

同形・同色のかえるを取って、二つ並べて見せました。

すると突然、後で声がしました。

「ははあ、ソウイウヤリカタがあるんだ。ソウイウヤリカタがあるのですねえ」

「比べてみて、違いをみつけたり、同じをみつけたりするの、考えることの始まりでしょ」

「なあるほどー、ソウイウヤリカタねえ」

景品の持ち主、Tさんです。いたく感心した声でしたから、Tさんは、萌ちゃんが遊びにくるたびに、これを、きっとやるにちがいないと思いました。その様子までが、目に浮かびました。

そして、九月の十一日、うちに来ていた萌ちゃん、冷蔵庫の野菜入れから、トマトやしょうがやしめじ茸などを出して並べていましたが、やがて「オンナジ!!」「オンナジ!」「オンナジ!!!」と言いながらこっちに来ます。見れば、何と、かわいらしい温室みかん。きれいなオレンジ色といい、小ちゃな手にちょうど持てる大きさといい、おへそのポツンも手ざわりも、ほんとに全くオンナジです。まあ、景品じゃないものから、オンナジを発見している！

「まあ、ほんと！　オンナジねえ」

れと、オンナジねえ。これと、こ

と、よろこびました。Tさん努力したなと思いました。それにしても、あの日から十二日目です。幼な子の学びとりのはやさに、おどろきました。

「子どもは、大人の親」、M・モンテッソーリの言葉は、ほんとうです。

学校の学習指導も、このようにお願いしたいものです。

まず、キッド・ウォッチング！

心を無にして子どもの音読を聴く。心を無にして子どものノートに書くペンの運びを見る。するとその子に教えることが分かってきます。

学力は、個別の指導の充実を得てこそ、たくましく伸びていきます。

（麦の会）

ふれあいのある心の教育も

西本　和彰

高知の学力が問われて、久しくなります。また、近頃の子供は、目的がなく、意欲がなく根気がないとも指摘され、無気力、無関心、無責任、無感動の四無主義ともいわれます。どうして、そんな状態になったのでしょうか。

家庭、学校で、教育理念を忘れ知識だけを詰め込むそんな教育ではなかったのか、心（人間性）を忘れた指導ではなかったか、それぞれに問いかけ、ふれあいのある心の教育もしてこそ真の教育といえると思います。

今日の「受験戦争」には不必要なものかもしれません。しかし、必要とされなかったものが今見直される時代となってきました。そのよう

な意味でも、昔のふれあいのあった教育、地域社会を思い出す事も必要ではないでしょうか。

そして今日までに学力向上のために、改革された事柄があったでしょうか、全くないといっても過言ではないと思います。ただ目標だけを掲げてきただけではないか、その基礎となるものを見つめ直し、今までのしがらみを捨て教育指導をする事により、学力向上が見えてくるのではないかと思います。

方法はと聞かれても、特効薬がある訳ではありません。教育にたずさわる方々の意識改革が、第一ではないでしょうか。教育現場の教員、教育機関の方々で、今までとは異質の指導方針を検討し、さらなる努力を重ね「任せられる学校」づくりをお願いいたしたい。

しかし、忘れてはならないのは家庭での指導です。学校教育の中で修得した知識や技能だけでは十分とはいえません。生涯学習社会といわれる今日、社会の進展に対応できる資質や、能力を生涯にわたって学習すること。また、基本的生活習慣についても必ず責任をもって家庭で指導する。その上で、教育現場に任せる。そうしたそれぞれの立場、責任において分担し義務、責任を果たし指導することが原則ではないでしょうか。

意識改革のない学力向上は、あり得ません。

二十一世紀に生きる子供達に、今何を残してやることが出来るか、本気で考え取り組む時が来たと思います。

知識はあっても知恵はないともいわれる子供達を、人間性豊かで知識、知恵のある二十一世紀に生きる子供達に育てたいものです。

今、やらなければという、危機感あふれた取り組みをしようではありませんか。

以前に、高知を変えなければという思いの県民の取り組みもあったはずです。将来に向かった教育体制、地域社会づくりを、皆様方にお願いいたします。

（高知県ＰＴＡ連合会副会長）

〝繰り返し〟の努力を

加藤　楯文

小さな私塾をまがりなりにも二十九年間続けるなかで、「学力」と言われるとどうしても文字通りに取ってしまう。もちろん、様々な意味あいを持っていることは承知しているし、どの角度からの分析もそれぞれに重要であるに違いないのだが、まずは手近な「読み書き式」の学力を考えてみたい。

この面から見た「高知の学力」は、明らかに劣っている。小学児童の学力の比較は資料不足で何とも言い難いが、中学生のそれは他県に比べ既にかなりの差がある。高校生までになると、その差は開くばかりである。

なぜなのか。まずは「繰り返し」の努力に欠けているのでは。特に公立中・高の授業にきめ細かな詰めが欠けている印象を受ける。面倒な努力を過度に嫌う、この時期の生徒によく見られる性癖に、先生が迎合し過ぎる。もちろん、こうした批判の全く当たらない優秀な先生はたくさんおられるが、概してそうである。愛宕中学校の校長をされていた堀江先生が、かつて「小、中、高で、あと五点上げる努力をすれば、高知の学力は全国レベルに追いつく」と話された記憶があるが、容易であるはずのこの努力が、未だに一貫して取り組まれていない。

それはなぜなのか。

教育を論じると必ず次のことばに至り、野にいる身には憤りさえ感じるのだが、敢て言うと「高知の低学力は教師の低努力にある」（まさか低能力ではあるまい）。ちょっと大げさだが、毎日生きるか死ぬかの努力を強いられる我が身の厳しさから言わせてもらうなら、学校の授業を垣間見るたびに吐き気がする。ここまで言うと後は惰力で「教師の低？力は高知大の教育学部の低能力にある」と続いてしまう。

国公立の大学の入試情報のなかで、常に低位置にランクされて微動だにしない。この努力を既に何十年続けているか。ここから輩出（排出ではない）され続ける教師群。その彼らを核とも頼む高知の公教育。何かが見えてくる。

「教育は人生の夢を生むもの。学力は生死をわける剣である」と私は信じる。教えたい、解らせたいと願う情熱が「こころ」を教えるのではないでしょうか。

情熱を忘れた教師よ、去れ！

（塾経営）

私の昭和④

戦時下の小学生

東　聰

〝降る雪や　明治は遠くなりにけり〟という句がある。この明治を昭和と置きかえて、この句を味わいながら私の生きた昭和を振り返って見る。

昭和十一年、私は旭小学校に入学、この年の二月には陸軍青年将校による二・二六事件があり、この頃から日本は軍国主義へ急傾斜して行く。日中戦争が始まり、戦線は拡大され展望のない戦いに足をふみ入れて行った。

国内では、あらゆる統制が徹底的に行われ、思想、信条、言論の自由はもとより集会にいたるまで当局の許可なしでは行えなくなり、国民の耳目にふれるものは一切、国の管理下に置かれるようになった。軍人が政治の場で幅をきかし、国民は政府の命ずるままに何の抵抗も、意志表示もせず、警察、憲兵の目を意識し、人前でほんねを口にする人はいなくなった。

天皇は現人神（アラヒトガミ）で、国民は民草であり、陛下の赤子（セキシ）であるということが徹底的に教えこまれた。このことを利用したかどうかは知らないが、すべてのことが天皇の名において行われた。国の管理下の報道を信じるしかない国民は、真実の世界の動勢など知るよしもない。仮に知ることが出来る立場の人間でも、口にすることは許されない時代であった。

小学生の私達は、世の中がどんな動きをしていても関係なく、親の言うことを守り、学校では教師の教えを絶対として守ればよいから、戦争があろうとなかろうと気楽なもので、「君は将来何になるか」と質問されたら「軍人になります」と答え、将来のことなど考える必要もなかった。

学校から帰れば、男子は男だけでビン玉、バイなどをして遊ぶ、女子はあやとり、オジャミ、なわとびなどして遊んだ。今の子供のように塾へ行くことなどないから、冬は近くの野山、夏は鏡川で体を鍛えることで結構楽しかった。

正月の元日、紀元節、天長節、明治節など祝日には、生徒は講堂に集まり天皇の写真（御真影）に礼拝して「君が代」を歌い、校長が白い手袋をしてうやうやしく読む「教育勅語」を、はなもすすらず、せきもせずありがたく聞いて、その日の定められた歌をうたう。皇太子の生まれた日にも歌をうたったが、この日は休日ではなかった。

「男女七歳にして席を同じうせず」小学校から教室は男女別であった。今の子供のように、男女が仲良く学校に行くとか、話をしたり遊んだりということはなかった。もし女子と話をしたり、遊んだりしているところを友達に見られたら「男と女とオニヤンベ」とはやしたてられ、揚げ句の果ては、してもいない〝お医者さんゴッコ〟をしていたといわれるから、女の子に対しては出来るだけ距離を保つようにつとめた。

教科書も、修身・国語では天皇に忠義をつくすこと、父母に孝行であることを重点にしており、楠公父子、二宮尊徳などの話が多かった。時にはピクニックをかねた校外授業もあって、鹿持雅澄の住居跡や墓地、平井収二郎の墓、谷干城の生家などへ行き、それ等の人物について学んだ。

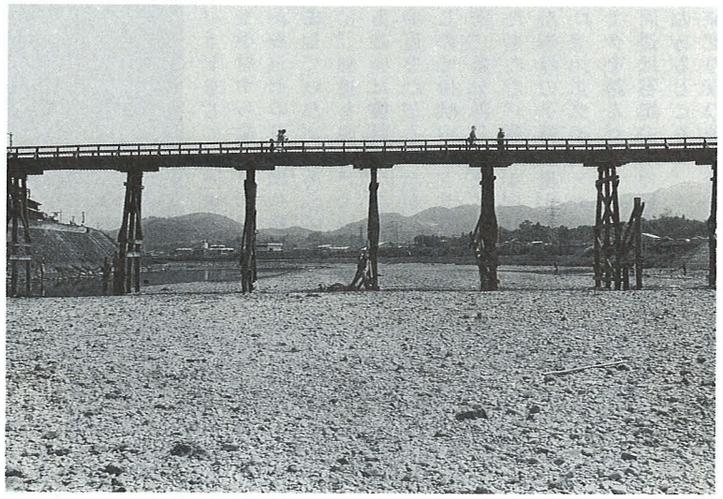
小学生は新聞を読まないから、世の中の動向など知らないが、学校で習うこと、親たちの話で少し位の知識は身につける。中国との戦争は日本が勝ち続けていると聞いていたし、南京が陥落した時など街をあげて祝い〝チョーチン行列〟をしたり、朝倉連隊の出征兵士を、道筋に並んで〝バンザイ〟をとなえながら、日の丸の小旗を持って見送った。ノモンハン事件のこと、ヒトラー、ムッソリーニなどの名前がニュースになったり話題になりだし、米国とのことなども取沙汰されだす頃、何となく以前にくらべて生活が不自由になってきたのが、子供心にも分かるようになった。

中国人を「チャンコロ」と呼び、蔣介石をバカ者呼ばわりし、米国、英国を悪しざまにいうのが当たり前になった頃、朝倉連隊の召集兵が私達の教室を一時借り上げるということになり、私達は第四小学校の教室を借りて勉強したこともあった。また家庭から金属類が供出され、校庭の一部が集積所に使用されたりもした。地理教科書に出ている海岸線、工業地帯の写真を墨でぬりつぶすということもした。

紀元二千六百年を盛大に祝ったのもこの頃のことだった。街ではエプロンに婦人会のタスキをした女性が、出征兵士に持たす「千人針」をお願いする姿も多くみられた。白い布にしるしをつけ、そこへ一人が一針さして〝モモクリ〟をする、「虎は千里行って千里帰る」という縁起をかついで、戦地での無事を願ってのことである。寅年生まれの人は〝モモクリ〟をその人の年の数だけするから大変だった。「千人力」というのもあった。

六年生の頃になると世の中がますます忙しそうになった。街には軍人の姿が多く見られ、生活物資も不自由になってきた。叔父が結婚したのもこの頃で、式場に人を集めてするようなこともなく、花嫁さんもちょっと美しい着物で髪に白いかざりをつけただけの質素なもの、祝いごとも家ですました。

十二月八日「太平洋戦争」が始まった。「大東亜共栄圏建設」「八紘一宇の精神」「鬼畜米英」などの標語や看板が多くなり、街は戦争一色になった。食糧、衣料、日常品が配給制になり、不自由なことばかりになる。「ぜいたくは敵だ」「ほしがりません勝つまでは」といい、緒戦の勝利に酔い、戦地の兵隊さんのことを思えと声をかけあって日々暮らすことになった。



上流側から見た旧紅葉橋（昭和44年）

島 総一郎写真集 「高知・失われた風景」より

戦火が拡大されるにしたがって、どこの家庭も身内から一人や二人の戦死者を出すようになると、戦死の公報が来ても遺骨が帰っても、人前で涙は見せず、告別式やお弔いも自粛するようになった。

「国おもう道に二つはなかりけり
いくさの庭に立つも立たぬも」

などの歌を学校で教わったり、節をつけてうたわされたりした。

尋常小学校が国民学校と名称が変わったのもこの頃である。戦争が激しくなったことを理由に修学旅行が中止になった。ラジオが〝軍艦マーチ〟で皇軍の戦勝を報じる時期も過ぎて〝海行かば〟の曲が多く流され、敗色がようやく濃くなり、戦線も縮小され、本土空襲がひんぱんになり、昭和二十年八月戦争は終わった。多くの戦争犠牲者を出し、住む家も、食う物、着る物も生きる希望もなくしての敗戦であった。戦争中は、政府の方針を批判すれば「非国民」だといわれ、天皇に失礼にあたる言葉を口にすれば「不敬罪」といって警察に連行される。そんな時代が終わって、日本人は人間を取りもどした。天皇も人間になった。

戦後間もなくの〝食糧メーデー〟で、ある労働者が、

「朕はタラフク食ってるぞ　ナンジ人民飢えて死ね」

と大書したプラカードを持って、行進に参加して物議をかもしたこともあったが、戦前のような問題にはならなかった。

戦後の昭和が始まった。

（元高知市職員）

市民フロアのご利用を

展示や会議などに最適、ご利用下さい。

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地　高知市はりまや町一―五―一・デンテツターミナルビル5F

申し込み　(財)高知市文化振興事業団　☎73―4365

高知の山と森（五）

伊吹山と瓶ケ森

西村　武二

私はまだ吉野川最奥の集落、寺川から昔の歩道をたどってシラザ峠へ登ったことがない。寺川からよさこい峠へあがる県道「石鎚公園線」を車で通るたびに、いつかは登ろうと思いながら、そのままになっている。

シラザ峠は前号の桑瀬峠と同様、本川村から伊予へ越える古くからの山道の国境の峠である。昭和六～八年にかけての営林局の「国境歩道」開設の時に同時に山小屋も建設され、「国境西小屋」がここシラザ峠に建てられた。現在の避難小屋はそれを再建したものである。もう一つの「国境東小屋」は桑瀬峠をすこし高知県側に下ったところにあったという。この小屋のおかげで国境山岳の縦走は大変楽になったという。

私が初めてシラザ峠を踏んだのは、今から約二十年前の秋、石鎚山での樹木実習の後、石鎚山の小屋でアルバイトをしていた専攻生のK君と、土小屋から桑瀬峠まで縦走した時である。その当時瓶ケ森林道はほぼ完成していたが、あえてここを通らずに、林道を眼下に、横に見ながら、あるいは横断しながら、あくまでも歩道をたどるのだが、岩黒山からはじめて伊吹山、シラザ峠、子持権現山、瓶ケ森と忠実に尾根筋をたどったものだ。普通なら敬遠される尖った岩峰の子持権現山もちょっとしたロッククライミングでしっかりとピークを踏んだ。このコースで伊吹山周辺は石鎚山系で最も美しいブナ林のあるところだ。

夏の緑の濃い時や秋の黄葉の時のブナ林もそれぞれ素晴らしいが、私にとって忘れがたいのは初めてブナの樹霜を見た初冬の伊吹山である。よさこい峠から林道を東進し北側斜面に回り込むと、突然白色の世界のブナ林に入り込んだ。前夜の冷え込みによって空気中の水蒸気が昇華し、氷の結晶となって小枝に付着したのだ。調査に同行した学生ともども車から降りて、早朝の身が硬直するほどの冷気の中に立ちつくし、ブナの梢を見上げたものだ。葉をすっかり落とした樹冠の細枝が、真っ白の樹霜をまとい紺碧の冬空にまぶしく映えるのに見とれていた。

ブナ林は冷温帯の落葉広葉樹林を代表する極相林だ。極相林は最も安定している森林で、親木が枯れても若木が次から次へと成長して大きくなるので、極相林は永久に維持されると考えられているが、すべての極相林がそうとは限らない。写真にみられるように、林床にササがびっしりと被っているのがブナ林の特徴だ。こんなにササが茂っていてはブナの実が落ちても発芽しないし、たとえ発芽しても光不足のために稚樹は枯れてしまう。ブナ林が更新するためにはどうしてもササが枯れなければならない。そしてブナの実が沢山稔らなければならない。ササが枯れて再生するまでの期間がブナの更新のチャンスなのだ。しかもこの期間にブナの実が豊作にならなければならない。ブナの結実は三～八年の周期で豊作になるという。自然にブナ林が更新するためには、六十年に一回といわれるササの一斉開花、一斉枯死を待たなければならないのである。ところでブナは二百年以上は生きるので、ブナの一生の間にはササの枯死は何度か起こる。この時ブナの実が沢山稔ればブナの稚樹は沢山発生するのである。さらにこの稚樹が若木にまで成長するためには、上にある親木が枯れて稚樹に光が十分あたるようにならないといけないのである。実にブナ林が更新するためにはいくつもの条件が揃わないとかなわないのである。その貴重なブナ林がここ伊吹山周辺にあるのだ。林内には遊歩道が整備されているのでブナ林の散策を楽しんでもらいたいものだ。

ブナは古名や方言でソバノキ、ソバグリとよばれる。このソバは「蕎麦」のソバと同じ語根なのである。蕎麦はかつて「ソバムギ」と呼ばれていて、その「ムギ」が略されて「ソバ」になったという。その「ソバ」の本来の意味は「稜」である。なるほど蕎麦の実もブナの実も、同じ三稜のある三角錐の形をしている。

ところでブナ属の学名は「ファグス（Fagus）」、「ファグス」とは「食べる」に由来するラテン古名で、獣類の餌になるブナの実から来ている。もちろん私たちが食べても大変おいしい。ヨーロッパのブナ林では、実際に家畜の食料としてブナの実が重要視されていたのである。一方ソバ属の学名「ファゴピルム（Fagopyrum）」は、「ブナの実に似た穀物」の意味である。ブナと蕎麦の実の類似性が、東西を問わず認められているのは面白い。

瓶ケ森は森林と言うよりはササ原の山だ。

登山口からウラジロモミの林に少し入ると道は二つに分かれ、右の急な尾根筋の道は男山を経て主峰の女山頂上（残念ながら頂上は愛媛県にある）に至る。左に行けば、「氷見二千石原」と呼ばれるなだらかで、広大なササ原を横切って女山頂上へ達する。尾根筋には風が強いため風衝樹形のウラジロモミ、シコクマメザクラ、コメツツジなどの低木がみられる。横断道からはササ原の中、各所に散在するウラジロモミ林や、その立枯れ状態の白骨林の木立を通して正面に石鎚山を望み、全く見ほれる光景である。尾根道と横断道で一周するコースを取れば、いろいろな方向からこの景観を楽しむことが出来る。

太平洋側の冷温帯では、ウラジロモミが針葉樹を代表している。ブナとウラジロモミはしばしば混交することがあるが、それぞれ単独で純林をなすこともある。瓶ケ森の氷見二千石原で偏在はしているが、優占している高木はウラジロモミである。ウラジロモミが斜面の上部に点在し、下部では集中してあることを思えば、この広大な斜面は元々ウラジロモミ林であって、それがなんらかの原因で、例えば山火事などで破壊され、その後ササが斜面を被って安定してしまったのかもしれない。この広大なササ原の成因はどこにあるのだろうか、興味あるところだ。

伊吹山のブナ林で童心にかえって　（池本彰夫氏撮影）

瓶ケ森林道のおかげで、私たちは実に容易に伊吹山や瓶ケ森に登ることができる。子供も、お年寄りも、そのおかげで労せず豊かな自然に触れることが可能になった。しかし本当に山や森林に深く親しめるようになったのだろうか。林道のおかげで私たちは車から森林を眺めるだけで満足し、森林内を歩いて自然に直に浸るという行為を放棄したように思えてならない。私にしてもついつい車を利用し、歩道にまで入り込まないことが度々ある。今だに歩いて寺川からシラザ峠に登っていない始末だ。

昭和初期の高知営林局による「国境歩道」、「国境東・西小屋」の開設は、いま林野庁・営林局が推進する「人と森林とのふれあいの場の創造（ヒューマン・グリーン・プラン）」の原点に相当するものであろう。半世紀以上前のそれは、なんと単純明快かつ効果的であったことか。言葉の真の意味での「人と森林とのふれ合いの場の創造」になっているのではないか。当時のこの計画の推進者の先見の明に敬服せざるを得ない。林道が出来てしまった今となっては、「林道は森林管理や緊急時の車のみ通行可とし、人はすべて歩くべし」としたらどうであろうか。暴論だろうか？

（高知大学農学部助教授）

高知市都市美デザイン賞　推薦募集

〈対　象〉平成四年一月一日から平成四年十二月三十一日までの間に高知市で完工した建築物や建造物。

〈推　薦〉自薦、他薦は問いません。はがきに①推薦物件の名称・所在地・完成時期②推薦理由③推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号を記入のうえ、推薦して下さい。一人何件でも推薦できますが、はがき一通につき推薦は一件とします。

〈表　彰〉推薦物件は、選考委員会で選考し、特賞一点、入賞二点を決定します。

〈締　切〉**平成五年一月二十九日㈮**

高知の映像コンテスト　写真募集

〈テーマ〉「高知を撮る」
高知県内に関する写真であれば撮影対象は問いません。

〈要　領〉どなたでも、一人何点でも応募できます。
ワイド四ツ切以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りで応募下さい。
詳しい応募要領については、文化振興事業団までお問い合わせ下さい。

〈賞　〉特選二点（賞金五万円と副賞）準特選十五点（賞金二万円と副賞）ほか。

〈締　切〉**平成五年一月二十九日㈮**

第3回　高知出版学術賞

当該年における最も優れた学術出版を顕彰する高知出版学術賞［高知県書店商業組合協賛］の、第三回（一九九二年中に発行された単行本が対象）の推薦を受け付けています。

自薦・他薦を問いません。所定の推薦書に必要事項を記入した上、該当図書二部を添え、平成五年一月三十一日までに提出して下さい。

推薦及びお問い合わせは、文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会までお願いします。

東欧を行く❶

チェコ

永野貴代美

〝百塔の街プラハ〟と言われるように、街全体に中世の城と石畳の道が点在している。その中でまず名前が挙げられるのがプラハ城。ゴシック様式のこの城は〝チェコの父〟と呼ばれ、この地方に黄金時代を築いたカレル四世が建てたもので、城の一部はチェコ・スロバキアの大統領府となっており、大統領在庁時にはポールに国旗が立てられる。しかし、現在はチェコ・スロバキア連邦大統領不在のため閉鎖されているが、通訳ハドリーチカ氏は「九三年一月一日の分離独立後はハベル氏がチェコ大統領として、またここに戻ってきますよ」と明るい（写真Ⅰ）。

プラハより南へ四十四km、ボヘミアにも数々の古城が残されているが、中でもコノピシュチェ城はオーストリア皇太子フェルナンドの居城だったもので、贅沢を極めた調度、後期ゴシックの彫刻や絵画で有名。そして圧巻は約五千もの狩猟トロフィー（鹿の角、鳥のはく製、熊の毛皮etc）。近くには城の料理に使う鯉を養殖するために造られた湖スラピがある。そして、この皇太子こそがセルビア青年に暗殺され第一次世界大戦の口実にされたその人である（写真Ⅱ）。

写真Ⅰ　プラハ城内大統領府

皇太子を暗殺したセルビアの青年ガブリエル・プリッツェ外六名はプラハの北、車で約一時間の所、テレジン収容所の独房で短い生涯を閉じ、今はその部屋が記念館となっている。しかし、テレジンが有名なのはそのことに因るものではない。

テレジンは十八世紀ヨセフ二世によってプロシアの軍隊からチェコを守るため要塞として造られたが、オーストリア＝ハンガリー帝国時代には監獄として、第二次世界大戦下ではナチ収容所の一つとして使われた。町全体を〈大きな収容所〉とし、全ヨーロッパよりユダヤ人をここに集め、アウシュビッツへの移送基地とした。また本来監獄だった〈小さな収容所〉はドイツの強制労働のために利用され、ARBEIT MACHT FREI（仕事をしてラクになれ）という看板が今も残る。四一～四五年の四年間にここに送られてきたユダヤ人は十二万五千人、うち三万五千人がここで死亡、八万七千人がアウシュビッツでガス処刑、何と生き延びたのは三千人だったという（写真Ⅲ）。

写真Ⅱ　コノピシュチェ城

写真Ⅲ　テレジン収容所

ミュージカル津野山物語

演出は格闘技であった

武市　哲夫

映画の撮影風景をご覧になったことがおありでしょう。実際でなくTVの画面でもけっこうです。監督は折りたたみの椅子（ちゃんとディレクターズチェアと名がついています）なんかにデンと座って、この世の憂いを一人で背負ったようなむずかしい顔をしていたんじゃないですか。少し斜にハンティングなど頭に置いておけばなおさら絵になります。

その上、ヨーロッパ渡りの葉巻などくわえていたら、これはもう涙の出るような文化的風景ではありませんか。

私は、たかだか田舎芝居の演出ですから、この仕事がそれ程カッコいいものとは思っておりません。己を知っているからです。

◇

しかし、それにしても「津野山物語」の演出はひどかったと思います。

ある時は、私は役者より過激に動きました。速度において、距離において然りでした。口角泡をとばしての移動です。これはもう、文化的作業と称するに価するようなものではありません。ただの格闘技です。喰うか喰われるかの生物学的生存競争なのです。なにぶん相手は三十六名多勢に無勢、衆寡敵せず…と来たらあとは当然、三十六計逃げるに…と続くところでしょうが、どっこい逃げることは許されないのです。

「ひとつ芝居というものをやってみよう」「ミュージカルに挑戦したい」「RYOMA の夢をもう一度」と意気込んで集まってくれた人々をおいて、私はどこへ逃げればいいというのでしょうか。

稽古が始まりました。蚊のなくような声、セリフにならない言い回し、ハハハと頬のひきつる笑い…。

ご安心下さい。幸いにして私は二十年を越す年月をアマチュア劇団に在籍し、殆どこういう人達ばかりを相手に芝居を作ってまいりました。免疫があります。抗体が蓄積されています。めったなことではへこたれません。

すこし貶して大きく褒める…私は役者のいい所をさがし、「いいぞ」「いいぞ」と言い続けました。

ホメゴロシではありません。ホメイカシです。

◇

稽古がようやく軌道に乗ってまいりました。割とスムーズに芝居が進行しかかった時から、私はこれはもう頑として役者に要求したことが二つあります。

「できるだけ津野山の人に近づけ」…これが一つです。ある日帯屋町を歩いていてちょいとバスで梼原まで運ばれた役者たちでは、その手で芋は掘れまい、その足は鍬で土をひき起こす足ではない…にわか集めの役者に対してずいぶん無理な注文をつけていきました。台本は一揆を起こさざるを得ないところまで追い込まれた農民達が、その日常では、実に明るく適当にのんびりと、適当にエッチにしっかりと大地に足をふんばって生きている生き様が描かれています。少々のことには堪えて生きられる人々が、業をにやして立ち上がらざるを得なかった一揆のパワーがそれでこそ生きてくると言えるのではないでしょうか。

◇

芝居は仕上げにさしかかりました。広い場所での稽古…集団の動きが重要な時期になりました。さあ、それからが私の格闘技のはじまりです。

役者さん達はしきりに一揆の芝居をしようとしていましたので、私は止めました。「みんなで一揆をやれ、一揆にみせる芝居をするな」これが私の要求の二つ目でした。

役者は次第に津野山の人になり、一揆は私が押さえても、もう止まらない程の自分達の一揆になりました。

私はやすんじて舞監に役者を渡しました。本番一週間前のことでした。

どっと疲れが出たように思いました。

（劇団ゆまにて演出）

ジャコウアゲハ

―土佐のトリバネアゲハか―

吉松　靖峯

香我美町岸本海岸にて

高知県はアゲハチョウ科の中で、黒い翅を有する通称クロアゲハと呼ばれるアゲハの種類を、たくさん見ることの出来る地域である。

高知市内に住む私の身近でも、ジャコウアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ、モンキアゲハを見ることが出来るし、少し山に入れば、オナガアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハなども見ることが出来る。

これらの翅の黒いアゲハの内、春から夏にかけて見られるジャコウアゲハが、私にはたいへん気になるチョウの一つである。

ジャコウアゲハという名前は、雄が麝香の様な芳香を放つことから名付けられたものである。

このチョウは、幼虫が川岸や、海岸近くの草原などに自生しているウマノスズクサやオオバウマノスズクサを食草としている。

高知市でも鏡川の堤防や、種崎千松公園付近などにこのウマノスズクサの自生があり、容易にこのチョウを見ることが出来た。

特に海水浴シーズンになると、千松公園の松林の間をたくさん飛んでいたことが気憶に残っている。

しかし最近では、ウマノスズクサの生える堤防がセメントで固められたり、宅地造成等で草原が無くなったりして、自生地が減少しており、このチョウも次第に身近から姿を消しつつあることは残念である。

このチョウは、黒い翅のアゲハの中でも色合いは地味で、また飛び方もアゲハの類にしては弱々しく、一見目立たないチョウであるが、林の間や、花や食草の回りを風に乗ってゆっくり飛ぶさまはたいへん美しい。

私が気になるチョウと最初に言ったのは、このチョウが、パプアニューギニアや西イリアンに生息している世界最大で、また最も美しいトリバネアゲハとなぜかイメージが重なってしまうからである。

昭和六十一年七月に、南国市浜改田の県道沿いにジャコウアゲハが大発生し、その模様を子供と共に観察することが出来た。

この時の発生では、夕方ともなると、付近一帯を飛び回っていた百頭を越すジャコウアゲハが、三～四メートル四方ぐらいの狭い場所に集まり、チョウの上にチョウが乗るといった、黒いダンゴ状に集まり、夜を明かすという珍しい光景を見ることが出来た。

私はこの時までジャコウアゲハの生態をゆっくり観察したことは無かったが、この機会とばかりに詳細に観察することが出来た。

ところが観察している内に、大きさこそ異なるが、卵、幼虫、蛹の形、色彩などの感じが、以前図鑑で見たトリバネアゲハのイメージと重なってしまったのである。

再度図鑑で、西イリアンに生息しているミドリトリバネアゲハを見てみたが、見れば見るほど、卵や幼虫の写真から見るイメージが似ており、また、食草がジャコウアゲハと同じウマノスズクサと書いていた。

この時から、私の頭の中では、ジャコウアゲハとトリバネアゲハのイメージが重なって離れなくなったわけである。

さらに詳細に調べるか、あるいは、チョウの専門の方に、このチョウの関係について聞いてみたいと思っているが、案外たいへん近い関係にあるのではないかと内心期待もしているところである。

昨年は七月に香我美町の岸本海岸近くの草原に大発生し、海岸のハマゴウの淡紫色の花の回りを数百のジャコウアゲハが舞う、夢の様な光景を楽しむことが出来たが、十一月に再度訪れた時には、一頭のチョウも飛んでなく、七月の光景がうその様に静まりかえっていた。しかし、付近の石の下には、黄味を帯びた、たくさんの蛹が春を待っていた。

また今年も土佐のトリバネアゲハの乱舞を楽しめそうである。

（地方公務員）

文化のひろば――⑥

美術作品の展示が自慢

―芸西村文化資料館―

芸西村は古くから農漁業を中心に栄えてきた。特に施設園芸が盛んで、その歴史は明治後期、県下で最初に行われた甘藷の促成栽培に始まるという。その後大正中期には、各地区に園芸組合が結成され、豆類、キュウリ、ナスなどが栽培されて今日の基礎がつくられた。戦後はさらに新しい技術や資材の導入と先駆者の努力によって飛躍的に拡充され、今日のようにビニールハウスがまぶしく輝く県下屈指の園芸地帯となった。ピーマン、ナス、キュウリ、シシトウなどに加え、最近ではメロンや花卉も栽培されている。

村の中央を南流する和食川と支流の長谷川が南部に約三〇〇haの平野をつくるが、圃場整備がほぼ一〇〇%に達する農業基盤整備がすすんだ村で、県内トップクラスの農家所得を誇る。

芸西村文化資料館は、国道55号線を琴ケ浜で北に入って少し行った村役場の前に建っている。校倉風のデザインの建物はなかなか堂々として立派である。この種の施設が、多くの場合「〇〇歴史民俗資料館」と呼ばれているのに対し、ここは「文化資料館」である。もちろんこの館の大きな役割の一つは郷土の民俗資料の保管展示である。しかし安直に「歴史」と後ろ向かずに「文化資料館」といっているところが興味をひく。

こうした施設が各地に建設されるのについては、高度経済成長期を境にして、先人たちが創造し現代に受け継がれてきた文化財や民俗資料が、惜しげもなく失われていくことと無関係ではなかろう。また最近の生活環境、社会構造の大きな変化に伴い、現在の生活用具においても、昨日まで有用であったものが今日は別の物に取って代わられ、一夜にして過去のものにされてしまう時世である。このことから、民具の収集保存が重要な課題となっているのである。

それに加えてこの館は、村民の芸術文化への関心の高まりに応えるために、村にゆかりのある人たちの書画の収集展示をすることを特色としているのである。

玄関を入ると、一階が農業・漁業関係資料の展示場で、まず地曳網舟型模型や魚網など漁業関係資料の展示が目をひく。もう今はあまり見られなくなった魚具もいくつかある。水稲関係の農具や養蚕関係器具をはじめ低床式ペーパー・ハウスや竹幌式ビニール・ハウスの模型なども、その変遷に懐かしさを覚える。「砂糖車」も興味をひくものの一つだった。芸西村の砂糖生産は江戸時代に始まったらしいが、戦後は輸入砂糖に押されて生産が減少する。全体にごてごて詰め込むのでなく、すっきりした感じの展示がいい。

芸西村文化資料館

二階の、郷土にゆかりのある美術家たちの作品展示も自慢の一つである。筒井広道の「若い家族」、山本淳の「芸西」、貞広高丸の「旅順兵営」、岡村修「トレド回想」谷岡久の「hands」、浜口富治の「花」、高橋虎之助の「坐った裸婦」などが、南不乗や島崎香雲の書とともに展示されていて、こころが洗われる時間が持てる。この他二階には、食生活の壺、かめ、皿椀などを中心とする民具が伝承の「かたりべ」として展示されている。千屋家文書や長崎家文書をじっくりみるのもいい。

文化資料館を一巡して外に出ると、隣の村民会館では丁度村民文化祭が開催されて賑わっていた。潮騒を聞きながらの散策が快適な琴ケ浜には「琴ケ浜松原野外劇場」や全国的に珍しい「海木健康プール」（温水）があり、今年の夏には図書館機能や視聴覚機能を備えた「生涯学習館」が完成するという。

ハウスの村芸西の文化は、これからも明日に向かって歩み続けることだろう。

□高知の出版□

中江兆民の本の周辺

ここ一、二年も中江兆民にかかわる本がいく冊かでた。全集がでてからの中江兆民への関心のたかまりと言ってよかろう。

まず夏堀正元の小説『目覚めし人ありて』（新人物往来社・九二年八月）があった。新しい資料をふんだんに使い、引用し、歴史を積極的に解釈しながら、自由民権論者わが道を行くといった感のある兆民の生き方をダイナミックに描き出していた。

その兆民を引き継いでいく幸徳秋水にも光をあてながら、読者をひきこんでいく兆民小説といってよかった。明治二十年に保安条例で東京を追われ、兆民とともに西下する高知出身の門弟初見八郎が兆民を「篤ス、篤ス」と呼び切りにしていたという静岡の「暁鐘新聞」主筆の話なども面白かった。

もう一冊の小説ふうのものに日下藤吾の『民権の獅子―兆民をめぐる男たちの生と死―』があったが、これは読みながらあやしかった。単純ミスが十数カ所ある上、大久保利通憎悪の書といってよく、のめりこみは分かるが、こういう乱暴もあるのかといった思いだった。

読みやすいものでは、ほかに『続ビゴー日本素描集』（岩波文庫・九二年十一月）と、清水勲の『漫画の歴史』（岩波新書・九一年五月）があった。ビゴーは一八八二（明治十五）年に来日し、陸軍士官学校で絵を教え、中江兆民の仏学塾でもフランス語を教えた。兆民門下の仏学塾メンバーともよく気が合った。

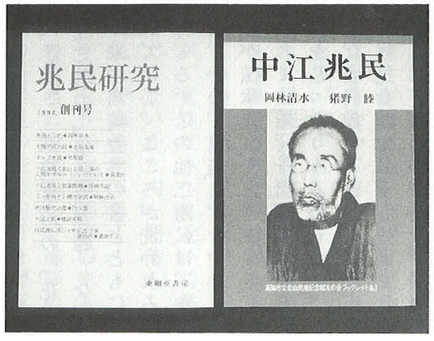
この「日本素描集」は明治期の風俗と自由民権運動をよくとらえ、土佐の谷干城や後藤象二郎の政治動向も漫画となって登場した。

清水勲の『漫画の歴史』には「中江兆民とビゴー」という一章があり、ビゴーが自由民権運動をとらえる優れた仕事をしていく上で、兆民が大きく協力したのではないかと、漫画にでてくる日本文の解析などから推論していっている。新しい兆民の登場である。

この本にはビゴーと交遊のあった「団団（まるまる）珍聞」の小林清親漫画も紹介されている。明治十五年十月七日号の「自遊の怨説」は板垣退助が自由党員に首根っこを押さえこまれて「板イッ！い退（タイ）ッ！」と言っている。政府の用意した金で洋行する板垣を批判したものであり、「自遊の怨説」は「自由の演説」を皮肉ったものである。土佐に関したもうひとつの「極楽落し」は、しっぽの生えた後藤象二郎が、大臣というエサの仕掛けられたねずみ取りに入りこんでいく痛烈な漫画である。

以上が読みやすいものであるが、論文では坂本多加雄の『市場・道徳・秩序』（創文社・九一年六月）があった。第三章で「中江兆民にむける道徳と政治」を、第四章では幸徳秋水にふれながら兆民の挫折をとりあげ、新しい視角から兆民を論じている。

ほかに『中江丑吉と中国』ジョシュア・A・フォーゲル著・阪谷芳直訳（岩波書店・九二年一月）、『遠山茂樹著作集』第三巻―自由民権運動とその思想―（岩波書店・九二年十一月）のなかに兆民に関する論考があり、兆民研究のふかまりを見ることができる。



こうしたなかで、高知でも自由民権記念館友の会発行のブックレット『中江兆民』に続いて、研究誌「兆民研究」が創刊された。中江兆民出身地の高知で、地味に兆民研究を積み上げていこうという動きが、没後九十年を越えてはじまったのはうれしい。

（猪野　睦）

第３回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る　雪の高知城　立花　一元

風流

風俗歳時記

われわれの生活は、普段は〈俗〉にどっぷりつかっているようにみえて、実はどこかでその〈俗〉から脱することを求めている。四季の変化や、その微妙な移り変わりを、巧みに生活の潤いとして取り入れていく〈風流〉が、大切にされたのもこのためである。

戦後社会の大きな流れになっている〝欧米化現象〟のなかで、伝統的な華道や茶道などがしっかり残り、わび、さびのこころがいまも大切にされているのも、こうしたことと無関係ではなかろうし、一見無用の空間に見える床の間が、いまも大切にされるのも頷ける。

いまとちがって昔は、〈風流〉は生活の中の〈遊び〉であるとともに、生活における〈精神の営み〉としてとらえられた。趣味についても、今日のように即物的になにをするというのでなく、ものごとがもっている味わいやおもむき、あるいはその面白みを重くみた。

初詣、七草粥、鏡開き、節分、雛祭り、端午の節句、七夕などとつづく年中行事も、単なる習俗としてでなく、そこにこうした心が込められていたのだ。

花見にしても、ただ花を口実に飲食するのが目的ではなかった。ことのはじまりは、陰暦三月から四月にかけて、村人たちが打ち連れて見晴らしのよい丘の上などで、豊作を祈るための宴だった。したがって、花などなくてもよかった。

もともと日本語の「花」は、咲く花のことだけを指す語ではない。正月や祭りに使う松やサカキ、あるいはユズリハなどを、花と呼んでいるところがあるように、人々がその松やユズリハから感得する「生命力」を花と見立てたのである。つまり丘の上の花見もその「生命」をいただくための儀式であった。

いまどき〝風流〟などといっても流行らないが、こうした趣（おもむき）を大切にする生活が、だんだんなくなっていく。

（晋）

「源氏物語を読む会」

幅広い活動も取り入れて

杉本　節子

昭和五十六年の春、親しい仲間が集まって古典を楽しもうということになり、「源氏物語を読む会」をつくりました。

最初のうちは場所がなく転々としましたが、次の年あたりから市民図書館の研究室を借りることができ、一般の方もお誘いして月二回、村山リウ源氏物語カセットを聞きながら原文を読むことにしました。その間犬養孝先生の万葉も勉強したり、古くからの日本の行事に因んで新春カルタ会、ひな祭り、桜狩り、秋の月見、紅葉狩りとあの山この野へとバスを仕立て、野外活動などもとりいれながら結構優雅に楽しんでいます。

そして昨年二月、やっと十年かかって「宇治十帖夢の浮橋」までたどりつき、「源氏物語五十四帖」を完読しました。円地文子先生の〝源氏の深惚れ〟ではないけれど、奥の深さ、また紫式部の偉大さにひかれ、またもう一度と、現在「第一帖桐壺」より取り組み始めています。こちらは第四木曜日十四時三十分～十六時です。

近年メンバーの中には外国に行く人も増え、幅広い学習活動をということで、なんと第一木曜日は美術鑑賞に切り替え、NHKエンタープライズのLDを毎月上映することにしました。ルーブル美術館、オルセー美術館、ルネサンスの息吹く街フィレンツェなどを続いて上映しています。これは第一木曜日十四時三十分～十六時、市民図書館二階視聴覚ライブラリーです。

連絡先　高知市北端町一五四

電　話　〇八八八－七三－二九〇六

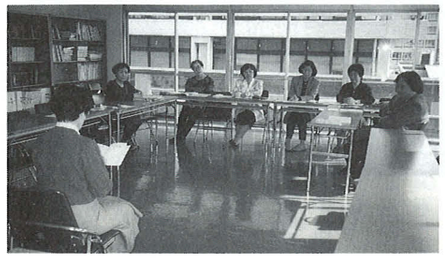
朗読「梨の会」

楽しく心を解放して

片岡ふみ子

「梨の会」は、市民学校の朗読講座六期生を中心に、一九八七年に発足したサークルです。現在は、八名の会員が、月二回（第二・第四火曜日午前）、市民図書館に集まって、テキスト練習（現在は宮沢賢治「風の又三郎」）と二カ月に一度の「ありのみ会」（各自が自主的に選んだ作品を朗読し、合評する）で勉強を続けています。そして、年に一回、喫茶店等を会場に、少しどきどきしながら公開の発表会を持って、一般や他サークルの方とも交流するようにしています。

市民学校以来、ご指導いただいている植田省三先生は、大変ていねいに個別指導をして下さいますが、初めのうちは、なかなか思うように表現できず、帰途、仲間で〝自棄コーヒー〟を飲んだこともありました。けれども、最近では、朗読以上に昼食時のよもやま話が楽しいという位にリラックスしてやっています。



「朗読は楽しく、心を解放してくれるが、同時に、自分の弱点と対面せざるを得ないきびしさがある」というのが、梨の会五年生の私の感想です。

実力の無いことも含めてつけた「梨の会」のネーミングは、大いに気に入っています。これからも、梨のようにさわやかで歯ごたえのあるサークルとして活動できたらと願っています。

連絡先　高知市仁井田二五九二－六

一三二号　樋口　方

電　話　〇八八八－四七－五七二五

組合機関誌「生活と医療」

組合員のきずな

彼末　明

「生活と医療」は、高知医療生活協同組合の創立（一九六六年八月）直後第一号がタブロイド版二ページで発行されました。その後数年は年一回～二回、一九七六年より年六回、七八年より毎月一回の発行を続け、タブロイド版四ページまたは六ページで、九三年一月で一七八号を数えるまでになりました。

「生活と医療」は、組合員の活動の交流、医療生協が運営している医療機関、医療活動の紹介などを行っています。

編集委員会は、常勤の職員（医師、看護婦など）と非常勤の組合員の十二名で構成され、月二回の編集委員会で企画、原稿依頼、編集校正、前月号の合評などを行い、組合員に分かりやすく、生き生きした姿、医療問題、医療活動の様子を伝えられるよう努力しています。

紙面の内容は、一面を毎号特集記事としています。その内容は、新しい医療活動や、組合員活動を紹介しています。

二面は、病気のはなし（連載記事）、視点（主張）、写真ルポなど、三面は、いきいき班紹介、新班紹介、くらしに役立つ社会保障の連載記事、組合員活動の紹介など、四面では、読者の声、支部長リレー日記、まちがいさがし、外来診療表などで紙面をつくっています。

組合員に待たれる「生活と医療」となるように、一層充実した紙面づくりに努力したいと思っています。

連絡先　高知市口細山二〇六－九

電　話　〇八八八－四三－〇〇二五

「うしおえ絵本を楽しむ会」

楽しいひと時を

赤松もと子

「うしおえ絵本を楽しむ会」は、潮江市民図書館で、奇数月の第一火曜日（午前十時～十二時）に開いています。

この会の前身は、今年一月に発足二十二周年を迎える「高知こども劇場」の読書会です。その後、五劇場に分割されましたが、一九八三年、南こども劇場の会員達が、「子育てのおしゃべり会」としてスタートさせたのが、今日の土台となりました。どなたでも、本を持っていなくても参加できます。

以前、横田稔さんが、会に参加し続けて下さり、絵本作家ならではのお話を伺う事が出来ました。また、「何か創造的な事を考えなさい」ともよく言っておられました。

九〇年秋、潮江市民図書館の小松さんから子どもの本の講演会を一緒にしませんかと誘われ、北村静子さんをお迎えしました。大勢の参加があって、大感激したことでした。九一年は、ホキ文庫の穂岐山禮さん、九二年は高知市立市民図書館の浜田倭子（しずこ）さんを、お迎することができて、新しい絵本の紹介に聞き入り、見いり楽しんだことでした。

九一年秋の読書週間に、県立図書館から表彰されたのは、細々ながらも続けている私たちへの「励まし」だったように思います。

絵本を通じての楽しいひとときを、あなたも、是非お出かけ下さいね。

連絡先　高知市土居町一三－一

高知南こども劇場事務局

電　話　〇八八八－三二－一一六九

散歩の途中で

上本宮町鏡川鉄橋下の道を上流に二百米も行った藪に、十羽をこす地鳥や烏骨鶏が住みついている。捨てられたもの同志が群れをつくり懸命に生きている姿は哀れでもあるが、逞しくもある。身を守るために夜ともなれば3～4mの樹上がねぐら、夜明けとともに早々と餌を求めて、人家近くまでやって来る人なつこいものもいるという。

'93年は酉年、少しでも幸せでありますように……。

風伯

文化元年

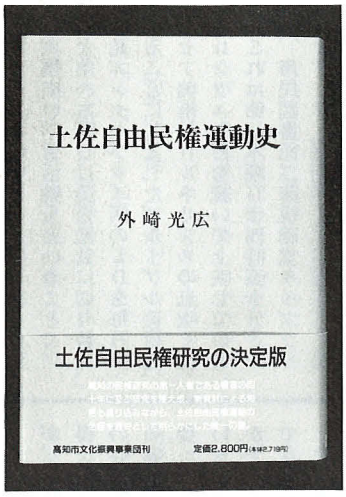
文化の時代が言われるようになり、美術館や博物館をはじめ各種の文化施設がぞくぞく建設されて、一種の施設ブームになった。

こうした中で徳島の「文化の森」、水戸の「芸術館」、愛知の「芸術文化センター」などは、規模の大きさもさることながらこれからの文化施設づくりの方向を示すものとして注目される。丸亀市の猪熊弦一郎美術館も、中都市以上でないとAクラスの文化施設を持つことができないといった常識を打ち破るものとなっている。文化の時代は、いま施設面で着実に二十一世紀を視野におくところにきている。

県内においても、伊野町の紙の博物館、安芸市の書道美術館などのユニークな施設をはじめ自由民権記念館、県立龍馬記念館、同歴史民俗資料館などが整備され、本年秋には待望の美術館も開館するはこびになっている。ことに美術館にはシャガールの作品購入が計画されており、実現すれば大きな朗報となろう。

ただひとつ高知市の市民文化ホールがまだメドがたっていない。四国の県都でも県・市それぞれに文化ホールをもっていないのは高知市だけである。二十一世紀を射程においた文化施設がつくられているとき、この状況はいかにもさびしい。早急に建設が望まれる。郷土文化会館あとの文学館も是非全国に誇れる内容のものにしてほしい。

高知の文化もいよいよ本格的なグレードアップのときがきた。今年がその意味の文化元年になることを期待したい。（華）



土佐自由民権運動史

新刊

外崎光広著　A５・上製本・424頁・定価2800円(税込)

高知県における自由民権研究の第一人者、外崎光広氏の最新刊。
著者の40年にわたる研究を集大成、新資料による知見も盛り込み土佐の自由民権運動の全容を通史として明らかにした決定版。

内容　第１章　自由民権の興起／第２章　士族反乱と農民騒動／第３章　立志社自由民権運動の展開／第４章　民権運動の最高潮／第５章　運動の拡大発展と弾圧／第６章　自由民権の退潮と激化事件／第７章　運動の再高潮と社会改良運動／第８章　天皇制国家の確立と土佐の民権／第９章　土佐自由民権の歴史的性格と現代的意義／資料

高知ニューイヤーデュオコンサート

1993年１月14日(木)　開場／午後６時　開演／午後６時30分
高知県民文化ホール(グリーン)
入場料¥2,000(前売り¥1,800)全自由席
主　催：(財)高知市文化振興事業団、朝日新聞社、高知県朝日会

〈メンバー〉　ピアノ／**米川　幸余**　ヴィオラ／**兎束　俊之**
〈曲　　目〉　シューマン／**ピアノとヴィオラのためのアダージョとアレグロ変イ長調**　作品70
シューマン／**謝肉祭**　作品９
ショパン／**アンダンテ スピアナートと華麗なる大ポロネーズ**　作品22
フランク／**ヴィオラ・ソナタ　イ長調**

新進気鋭のピアニスト・米川幸余氏とヴィオラの第一人者・兎束俊之氏のデュオコンサートを開催します。新年にふさわしい爽やかなひと時、ぜひご来場ください。
チケットは市内主要プレイガイドならびに文化振興事業団で扱ってます。

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町５丁目２番３号　TEL(0888)７３－４３６５
郵便振替 徳島 8-14869